

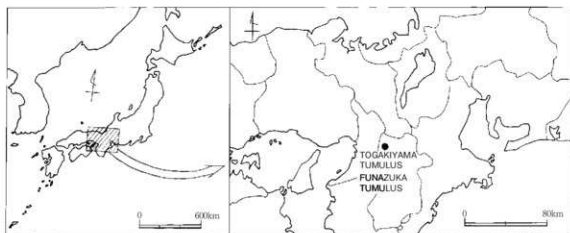
戸垣山古墳・舟塚古墳発掘調査報告書Ⅱ

2024年3月

奈良大学文学部文化財学科

例 言

1. 本書は奈良県生駒郡斑鳩町龍田南2丁目に所在する戸垣山古墳と、法隆寺1丁目に所在する舟塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が共同で、2023年2月14日から3月28日、2023年8月3日から9月13日までの計57日間に実施した。調査は斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課長補佐荒木浩司、奈良大学文学部教授豊島直博が担当した。出土資料の整理分析および本書の執筆は2023年4月～2024年3月に奈良大学文学部文化財学科が行った。
3. 現地調査、整理作業の参加者は第2章に記す。写真撮影は各調査区の担当者と牛嶋 茂が行った。製図の分担は挿図目次に示した。
4. 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、北方位は座標北を示す。
5. 発掘調査および報告書作成において下記の諸氏、諸機関のご指導とご援助を賜った。
相原嘉之、青柳正規、泉 眞奈、岩越洋平、岩崎郁実、上西恭平、上野あさひ、魚島純一、大西貴夫、岡田 健、小澤 毅、小田木治太郎、鐘方正樹、加納大誉、辛川あかり、川上洋一、川畑 純、絹島 歩、北山峰生、小林青樹、小林友佳、杉井 健、鈴木郁哉、清野孝之、関川高功、園原悠斗、田中秀弥、谷澤亜里、寺前直人、廣瀬 覚、東影 悠、比佐陽一郎、古谷真人、前田俊雄、松島隆介、道上祥武、村瀬 陸、山口等悟、若杉智宏、和田一之輔、財務省近畿財務局奈良財務事務所、奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課、(株)呉竹荘
6. 本書の執筆は豊島直博、池本優衣、岩田朱音、植木実果子、上野喜則、尾形優真、行天就要、竹村昂起、常盤敬仁、松木研太、水川慶紀、望月拓海、森田将圭が分担して行った。執筆者名は目次および執筆箇所末尾に記した。編集は斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課参事平田政彦、荒木と協議のうえ、豊島の指導を受けて松木、谷野誠也が担当した。
7. 本書は令和5年度奈良大学特別研究「奈良県斑鳩地域における古墳の調査研究」の成果の一部である。
8. 今回調査の出土遺物と作成した記録類は、報告書の刊行後、斑鳩町教育委員会で保管する。



戸垣山古墳・舟塚古墳の位置

戸垣山古墳・舟塚古墳発掘調査報告書Ⅱ

目 次

例 言	
第1章 歴史的環境	常盤敬仁……………1
第2章 戸垣山古墳	……………3
1 調査の経緯と経過	……………3
(1) 過去の調査	植木実果子……………3
(2) 発掘調査の経過	植木……………3
2 発掘調査の成果	……………5
(1) 調査区の配置	松木研太……………5
(2) 第4調査区	池木優衣……………5
(3) 第5調査区	松木……………5
3 出土遺物	尾形優真……………7
第3章 舟塚古墳	……………8
1 調査の経緯と経過	……………8
(1) 過去の調査	森田将圭……………8
(2) 発掘調査の経過	森田……………8
2 発掘調査の成果	……………9
(1) 調査区の配置	岩田朱音……………9
(2) 墳 丘	望月拓海……………10
(3) 石 室	望月……………11
(4) 遺物の配置	松木……………11
3 出土遺物	……………13
(1) 鉄 器	上野喜則……………13
(2) 須 恵 器	行天就要……………14
(3) 玉 類	水川慶紀……………14
(4) 瓦	竹村昂起……………15
第4章 総 括	豊島直博……………17
図 版	

図 版 目 次

図版 1	1	戸垣山古墳調査前の状況（北西から）
	2	戸垣山古墳第 4 調査区完掘状況（北東から）
図版 2	1	戸垣山古墳第 5 調査区北東側完掘状況（北東から）
	2	戸垣山古墳第 5 調査区南西側完掘状況（南東から）
図版 3	1	舟塚古墳調査前の状況（南から）
	2	第 2 調査区完掘状況（西から）
	3	第 2 調査区完掘状況（東から）
図版 4	1	舟塚古墳石室上面検出状況（南から）
	2	石室内転落石検出状況（北から）
図版 5	1	舟塚古墳石室検出状況（南から）
図版 6	1	石室内遺物出土状況（南から）
	2	袖石付近土器出土状況（南東から）
	3	奥壁付近遺物出土状況（南西から）
図版 7	1	石室奥壁（南から）
	2	石室東壁（西から）
	3	石室西壁（東から）
図版 8	1	戸垣山古墳出土土器
	2	舟塚古墳出土辻金具
	3	舟塚古墳出土須恵器
	4	舟塚古墳出土軒丸瓦
	5	舟塚古墳出土軒平瓦

挿 図 目 次

戸垣山古墳・舟塚古墳の位置（高井製図）	iii
図 1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布図（豊島製図）	2
図 2 戸垣山古墳の調査区の配置図（豊島製図）	4
図 3 第 4・5 調査区平面図・断面図（西谷製図）	6
図 4 戸垣山古墳出土土器（進藤製図）	7
図 5 舟塚古墳の調査区の配置図（豊島製図）	10
図 6 墳丘断面図（第 2 調査区北壁断面）（松木製図）	11
図 7 舟塚古墳石室実測図（望月製図）	12
図 8 石室内遺物出土状況図（豊島製図）	13
図 9 舟塚古墳出土辻金具（西谷製図）	13
図 10 舟塚古墳出土須恵器（村松製図）	14
図 11 舟塚古墳出土瓦（村松製図、進藤拓本）	15

第1章 歴史的環境

斑鳩町の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は奈良県北西部の矢田丘陵の南端に位置し、難波津から飛鳥宮へ至る経路上に当たる交通の要所であった。発掘調査成果の報告に先立ち、斑鳩町内の主要な古墳と古墳時代の遺跡について述べる。

前期古墳 前期古墳には、胸塚古墳(16)が挙げられる。胸塚古墳は2000年～2002年の発掘調査で出土した二重口縁壺から、築造年代は4世紀後半頃と推測され、全長49m以上、後円部径34mの2段築成の古墳であることが判明した(荒木2007, 2011)。

中期古墳 中期古墳には本書で取り上げる戸垣山古墳(1)のほか、斑鳩大塚古墳(3)、甲塚古墳(7)、瓦塚古墳群(15)、寺山古墳群(10)などが挙げられる。

瓦塚古墳群は斑鳩町と大和郡山市の境界付近に位置し、2基の前方後円墳と1基の円墳で構成される。1号墳、2号墳とも全長100mに近く、有力な首長墓である(関川編1976、平田2014)。斑鳩大塚古墳は1954年に銅鏡、筒形銅器、石銅、短甲等が出土し、発掘調査が行われた(北野1958)。その後、奈良大学と斑鳩町教育委員会が2014年～2017年に発掘調査し、直径約43mの円墳で、東側に張出部をもち、周濠を有することが判明した(豊島・南編2018ほか)。甲塚古墳は奈良大学と斑鳩町教育委員会が2018年～2021年に発掘調査を行った。調査の結果、直径約20mの円墳で、墳頂部に木管直葬の埋葬施設をもち、重圓文鏡1面が出土した(山本編2022ほか)。土器が出土しておらず、築造年代は不明だが、ここでは中期に含める。

後期古墳 後期古墳には藤ノ木古墳(5)、春日古墳(6)、仏塚古墳(13)、舟塚古墳(2)、梵天山古墳群(11)、寺山北古墳群(12)などがあげられる。

藤ノ木古墳は直径約50mの円墳である。全長約14mの両袖式横穴石室を有し、二上山白色凝灰岩製の削り抜き式家形石棺が納められていた。棺内から金銅製の冠や履、銅鏡、刀剣、ガラス製の玉類などの副葬品が出土した。男性の人骨2体分が確認され、被葬者は、極めて高位の人物であったと推測される(勝部ほか編1990、前園ほか編1995、平田2008)。

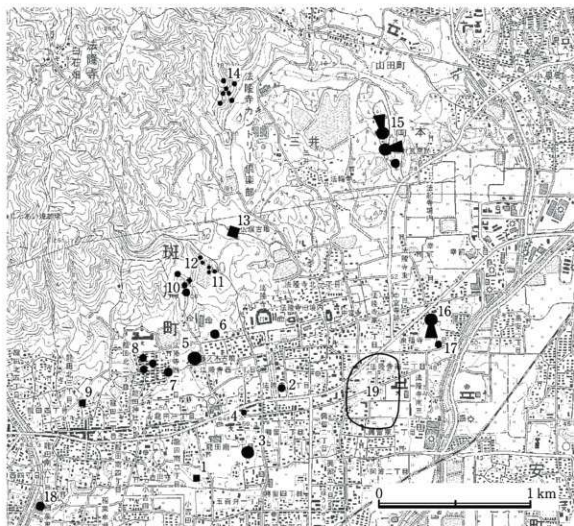
春日古墳は直径約30mの円墳で、墳丘南側に石室石材の一部が露出している(平田2013)。藤ノ木古墳に後続する首長墓と考えられる。仏塚古墳は法隆寺の北方に位置する一辺約23mの方墳である。両袖式の横穴式石室から陶棺片が出土している(河上・関川1977)。舟塚古墳は法隆寺の参道付近に位置しており、直径8.5m以上の円墳である。石室の一部の石材が確認され、須恵器の子持壺、脚付壺、坏身、坏蓋などが出土した(小林・豊島2023)。

終末期古墳 終末期古墳には竜田御坊山古墳群(8)、神代古墳(9)が挙げられる。竜田御坊山古墳群は3基の古墳で構成される。1・2号墳の墳丘形態や規模など、詳細は不明であるが、3号墳は円墳で、埋葬施設は横口式石槨である。石槨内には黒漆塗陶棺が安置されていた。棺内から若年男性の人骨1体と管状ガラス製品と三彩有蓋円面硯、琥珀製枕など、他に類を見ない副葬品が出土していることから、被葬者は上官王家の一員と推測される(泉森編1977、山内1998)。

神代古墳は2019年に奈良大学が測量調査を行い、一辺20m以上の方墳で、露出している石柵内法の規模は2.6×1.6mである（豊島・松島2020）。

集落遺跡 集落遺跡は酒ノ免遺跡（19）が挙げられる。酒ノ免遺跡は20次以上におよぶ発掘調査が行われている。多数の建物が検出され、5世紀末から7世紀初頭にかけて営まれていたことが判明した。奈良県下有数の集落遺跡である（藤井1986）。

以上が斑鳩町の主な古墳と古墳時代の集落遺跡である。 （常盤敬仁）



1. 戸塚山古墳 2. 舟塚古墳 3. 斑鳩大塚古墳 4. 亀塚古墳 5. 藤ノ木古墳 6. 春日古墳 7. 甲塚古墳
8. 竜田御坊山古墳群 9. 神代古墳 10. 寺山古墳群 11. 梵天山古墳 12. 慶花池古墳群 13. 仏塚古墳
14. 三井古墳群 15. 瓦塚古墳群 16. 駒塚古墳 17. 調子丸古墳 18. 稲葉車籠古墳群 19. 酒ノ免遺跡

図1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布図

第2章 戸垣山古墳

1 調査の経緯と経過

(1) 過去の調査

古墳の現状 戸垣山古墳は国（財務省近畿財務局奈良財務事務所）の所有地である。現在は斑鳩町が管理団体となり、古墳の維持管理を行っている。

墳丘は西側を里道によって、北側を町道の拡張に伴い設置された擁壁の一部によって削平され、東側と南側が墳丘の現状を保っていると考えられる。

これまでの調査 1974年に奈良県立橿原考古学研究所によって測量調査が実施され、一辺約20m、高さ約3.5mの方墳であると推定された（中井1975）。その後、2017年8月に奈良大学文化財学科が測量調査を実施し、最大で南北約19m、東西約17mの方墳である可能性が高まった（豊島・南2018）。

1998年に町道拡張に伴う古墳北側の擁壁工事の際に第1次調査が実施されたが、墳丘盛土は確認できず、少量の埴輪片が出土した（荒木2014）。墳丘の測量図から墳形と規模の把握が難しく、また、古墳周囲の開発に備えて恒久的な保存を講じる必要が生じたため、2022年2月18日から3月24日にかけて第2次調査を行った。設定したすべての調査区で墳丘盛土を確認し、墳丘の中央付近で埋葬施設と考えられる土坑の一部を確認した。また、確認できた墳丘の規模は南北17.9m、東西15.5mであり、埋葬施設の可能性がある土坑は北東から南北に主軸をとり、長さ2.9m、幅1.1m以上であることが判明した（小林・豊島編2023）。（植木実果子）

(2) 発掘調査の経過

調査の経過 第2次調査の成果を踏まえ、墳形と墳丘規模を明らかにするため、第4調査区と第5調査区を設定した。

今回の調査は斑鳩市教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が共同で行った。調査期間は2023年2月14日から3月27日にかけての休日と雨天を除く計28日間で、経過は以下の通りである。

- 2月14日 第4調査区を設定。堀削開始。
- 2月22日 東側を0.5m拡張。
- 2月23日 墳丘面確認。
- 3月1日 墳頂付近の形から方墳である可能性を確認。写真撮影。
- 3月8日 第4調査区埋戻し。第5調査区を設定、堀削開始。
- 3月21日 写真撮影を行い、断面図及び平面図の作成開始。
- 3月25日 第5調査区埋戻し。
- 3月27日 埋め戻しと撤収作業を行い、作業の全工程を終了。

調査参加者 今回の発掘調査参加者は以下の通りである（括弧内の学年は2023年3月当時）。
 豊島直博（文学部教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、橋本侑大、谷野誠也（以上、大学院修士1回生）、井出日和、上野喜則、尾形優真、加藤晴子、行天就要、松木研太、水川慶紀、宮崎雅人（以上、文学部3回生）、相澤嘉伸、青野 鼓、池本優衣、植木実果子、常盤敬仁、望月拓海、森田将圭（以上、文学部2回生）、赤塚美樹、上田純寧、岡田竜一、小田真由佳、進藤久慈、中川歩美、西谷 漸、藤田直承、村田 陽、米津貴史、米橋 咲（以上、文学部1回生）、梅原七海、木村祐熙（以上、大阪公立大学3回生）、竹村昂起（佛光大学3回生）。（植木）

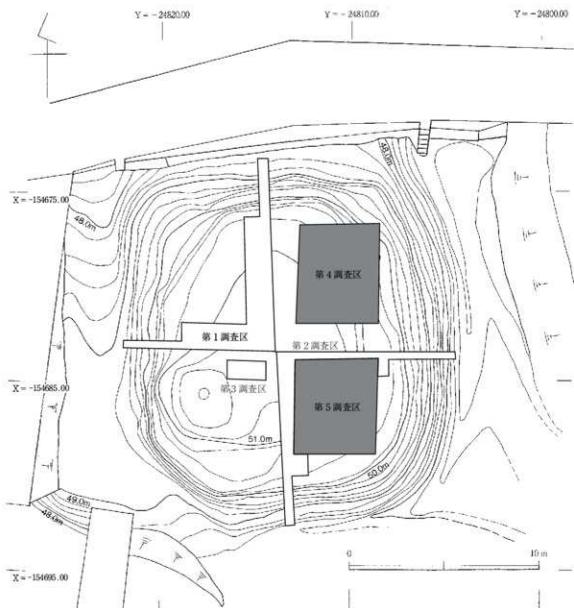


図2 戸垣山古墳の調査区の配置図 1：200

2 発掘調査の成果

(1) 調査区の配置 (図2)

今回の調査は古墳の埋葬施設および墳形の確認を目的とした。第2次調査の成果を踏まえつつ、墳形を確認するためにも平面的に調査区を設定する必要があるため、第2次調査の第1調査区の南北側、第2調査区の東西側に隣接した墳丘の北東部に第4調査区とした。また第2調査区の南側と東側に一部重複する形で墳丘の南東部に第5調査区とし、両調査区ともに長方形の調査区を設定した。

(松木研太)

(2) 第4調査区 (図3、図版1)

位置と目的 第4調査区は墳形や規模、墳丘の様相を確認することを目的に設定した。当初は南北5m、東西4mの長方形に設定した。しかし、より広い範囲で墳丘の様相を知るために調査範囲を拡張する必要があるため、東に0.5m拡張し、南北5m、東西4.5mの長方形に設定した。最終的な調査面積は22.5㎡である。

基本層序 調査区北壁は上から順に、表土である暗褐色砂質土(厚さ約5~10cm)、近現代盛土層である明灰褐色砂質土(厚さ約15~30cm)、後世の堆積土である灰褐色砂質土(厚さ約15cm)、須恵器片を含み、溝SD01に対応する暗灰褐色砂質土(厚さ約10~30cm)を経て、墳丘盛土層である明灰色砂質土に至る。

調査区東壁は上から順に表土である暗褐色砂質土(厚さ約1~15cm)、近現代盛土である明灰褐色砂質土(厚さ約5~20cm)、黄褐色粘土質(厚さ約5~45cm)、須恵器片を含み、溝SD01に対応する後世の堆積土である灰褐色砂質土(厚さ約10~30cm)を経て、墳丘盛土層である明灰色砂質土に至る。

墳丘盛土上面は最も高いところで標高約50.3mである。

検出遺構 墳丘盛土と溝SD01を確認した。墳頂付近の盛土は標高50.2m付近で調査区の西壁から0.9m、南壁から3.1mにわたって方形に検出された。墳頂付近の形から、戸塚山古墳が方墳である可能性が高まった。溝SD01は北から東に向かう幅約0.1~1.1m、深さ約15cmの浅い溝で、後世のものと考えられる。

出土遺物は、遺物包含層から須恵器片などが出土した。

(池本優衣)

(3) 第5調査区 (図3、図版2)

位置と目的 第5調査区は墳丘の南東部の様相を探るため、第4調査区から平行して南側に設定した。調査区は第4調査区と同様に東西4.5m、南北5mに設定し、調査面積は22.5㎡となった。また、近現代盛土を掘削し終えた後、墳丘の傾斜面を記録するために調査区の南東方向へ土層観察用の畔を幅50cmで設定した。

基本層序 調査区東側では表土の黒褐色砂質土(厚さ約5~10cm)、近現代盛土である明灰褐

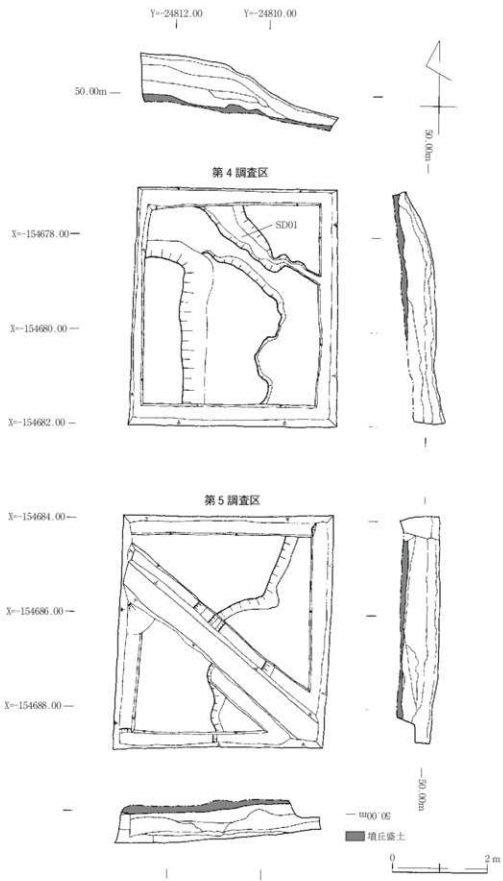


図3 第4・5調査区平面図・断面図 1:80

色砂質土（厚さ約20～30cm）、黄褐色粘質土混合灰褐色砂質土（厚さ約5～45cm）、古代から中世の盛土層の灰褐色砂質土（黒色粘土ブロックを含む、厚さ約5～20cm）、上層より砂礫を含まない灰褐色砂質土（厚さ約10～25cm）、墳丘盛土である明茶褐色砂質土（厚さ約5cm）、墳丘盛土であるしまりが強い明灰色砂質土（黄色粘土ブロックを含む、厚さ約10～20cm）が確認された。墳丘盛土上面は最も標高が高い所で標高約50.2mであった。

調査区南側の層序は、表土である黒褐色砂質土（厚さ約5～20cm）、近現代盛土である明灰褐色砂質土（厚さ約5～25cm）、黄褐色粘質土混合灰褐色砂質土（厚さ約10～45cm）、古代から中世の盛土層の灰褐色砂質土（厚さ約5～40cm）、灰褐色砂質土（黄色粘土ブロックを含む、厚さ約5～20cm）、灰褐色砂質土（厚さ約10～30cm）、墳丘盛土層であるしまりが強い明灰色砂質土（黄色粘土ブロックを含む、厚さ約10～20cm）に至る。

検出遺構 調査区全体で墳丘盛土を確認した。墳丘盛土は墳丘中心部から南および東へ緩やかな傾斜をなしている。調査区北壁の西から約3m地点から南壁の西約2m地点まで、一部西側へ窪む部分が散見されるが、後世の削平と考えられる。また第4調査区で認められたような方形の墳丘盛土は明確に確認できなかった。

出土遺物は近現代盛土層から埴輪、土師器、須恵器、瓦、陶磁器が多く出土し、灰褐色砂質土から完形の土師器皿（図4）が出土した。（松木）

3 出土遺物（図4、図版8）

種類と量 今回の調査では、コンテナ2箱分の遺物が出土した。内容は弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦質土器、陶磁器、金属器と種類が豊富である。出土遺物はおもに近現代盛土層から出土した。

土師器 図4は第5調査区の灰褐色砂質土から出土した土師器皿である。口径は9.8cm、高さは1.9cmである。口縁部の内外面と外面上半部、内面がヨコナデ、口縁部の一部にユビオサエを施す。外面下半部にはユビオサエを施す。胎土は密で焼成は良好である。色調は内外面ともに明黄褐色で、外面の一部は浅黄橙色を呈する。以上の特徴から京都産土師器の編年による皿Aに位置づけられ、年代は13世紀前半頃と考えられる（日本中世土器研究会2023）。

（尾形優真）



図4 戸垣山古墳出土土器 1:2

第3章 舟塚古墳

1 調査の経緯と経過

(1) 過去の調査

古墳の現状 舟塚古墳は国（財務省近畿財務局奈良財務事務所）の所有地で、現在は斑鳩町が古墳の維持、管理を行っている。舟塚古墳は法隆寺参道の東側にある法隆寺観光自動車駐車場内に位置し、墳丘裾を石垣で覆われた状態で残存している。古墳名は樟の舟が埋まっているという伝承によるものであると考えられる（前掲1990）。

これまでの調査 舟塚古墳は2019年度に古墳の南側隣接地で発掘調査を実施したが、古墳に関する遺構や遺物は出土しなかった（第1次調査）。その後、2022年度に斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科によって測量調査と発掘調査が行われた（第2次調査）。測量調査では直径約8.5m、高さ約1.5m以上の円墳であることが明らかになった。

発掘調査では墳丘盛土と石室の一部と考えられる石材を検出した。石材の状態から古墳の北側が奥壁、南側が石室の入り口である可能性があることを確認した。石室入り口付近からは須恵器子持壺、脚付壺、坏蓋が出土した。これらの須恵器は陶邑福年のTK43型式期に位置づけられる（小林・豊島編2023）。

今回の調査は古墳の規模と築造年代や石室の構造と遺存状況を明らかにするために行った。

（森田将圭）

(2) 発掘調査の経過

今回の調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が共同で行った。調査期間は第3次調査が2023年2月14日から3月28日にかけての休日と雨天を除く計29日間、第4次調査が2023年8月3日から9月13日にかけての休日と雨天と除く計28日間で行った。おもな調査経過は以下の通りである。

第3次調査

- 2月14日 機材搬入。第2調査区を設定し、掘削開始。
- 2月17日 西側の北壁で石材を検出。
- 2月18日 調査区の東側で石材を検出。
- 2月20日 調査区の西側を拡張する。
- 2月21日 石材の検出状況を写真撮影。
- 2月22日 第1調査区を再掘削し拡張する。第2調査区北壁の断面図作成。
- 2月23日 石室側壁と奥壁を検出のため調査区を拡張。

- 2月27日 西側側壁を検出するため調査区を拡張。
- 3月1日 清掃の後、写真撮影。
- 3月3日 石室の平面図作成開始。石室南側を掘削する。
- 3月8日 石室南側の縦断アゼの断面図作成。
- 3月15日 壁面図作成開始。
- 3月16日 墳丘盛土の検出のため東西にサブトレンチを掘削する。
- 3月24日 断面図を作成。埋め戻し開始。
- 3月28日 埋め戻しと撤収作業を行い。調査終了。

第4次調査

- 8月3日 機材搬入。旧調査区を掘削開始。
- 8月8日 石室内の転落石を搬出。石室内に土層観察用アゼを設定し、掘削開始。
- 8月10日 遺物検出状況の平面図を作成。記録を終えた遺物から取り上げを行う。
- 8月11日 アゼの断面図作成開始。
- 8月24日 写真撮影に備え石室内の清掃。
- 8月25日 遺物出土状況の写真撮影。
- 8月29日 石室袖石付近の須恵器の立面図作成。
- 8月30日 石室の完掘写真撮影。玄室床面に断ち割りを入れる。断ち割りの平面図、断面図、石室の壁面図を作成する。
- 9月5日 側壁、奥壁、玄門部の立面図作成。
- 9月8日 取材への対応。現地説明会準備。
- 9月9日 現地説明会を開催。
- 9月12日 転落石を石室内に搬入し、埋め戻し。
- 9月13日 周辺の清掃作業と撤収作業を行い、調査終了。

調査参加者 第3次調査の参加者は戸塚山古墳第3次調査と重複するので、省略する。第4次調査の発掘調査参加者は以下の通りである（括弧内の学年は2023年8月当時）。

豊島直博（文学部教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、谷野誠也（大学院修士2回生）、岩田朱音（大学院修士1回生）、上野喜則、行天就要、松木研太、水川慶紀（以上、文学部4回生）、池本優衣、植木実果子、常盤貴仁、望月拓海、森田将圭、渡部孝哉（以上、文学部3回生）、岡田竜一、進藤久慈、西谷 漸（以上、文学部2回生）、松田 凌、村松明日翔、美濃部光祐（以上、文学部1回生）。竹村昂起（佛教大学4回生）

（森田）

2 発掘調査の成果

(1) 調査区の配置 (図5)

今年度の調査では、石室の詳細な構造と残存状況の確認を目指した。

第3次調査において墳丘の東西方向の様相を探るため、南北約1m、東西約7mの第2調査区を設定した。また、石室の推定位置に南北5.2m、東西約2.5mの第3調査区を設定した。なお、第4次調査は第3次調査で設定した第3調査区の再掘削を行った。

以下、各調査区の成果について述べる。

(岩田朱音)

(2) 墳丘 (図6、図版3・4)

墳丘は大部分が削平されており、現状では直径約8.5m、高さ約1.5mの円形を呈している。墳丘の裾は上面をコンクリートで固めた石垣で囲まれている。

基本層序 基本層序は上から順に表土である黒褐色砂質土 (厚さ約10cm~20cm)、現代盛土である黄褐色砂質土 (厚さ約10cm~30cm)、近世盛土である灰褐色砂質土 (厚さ約10cm~30cm)、灰黄褐色砂質土 (厚さ約10cm~20cm)、石室解体時の埋土である黄褐色砂質土 (厚さ約5cm~25cm) を経て、墳丘盛土層である茶褐色砂質土、暗褐色砂質土 (厚さ約50cmから90cm) に至る。墳丘盛土層は1単位約10cm~20cmで積まれている。

近世盛土である灰褐色砂質土層からは古代の瓦や近世までの土器が出土し、石室解体時の埋土である黄褐色砂質土層からは飛鳥時代のもと考えられる素弁蓮華文の軒丸瓦 (図11-1) が出

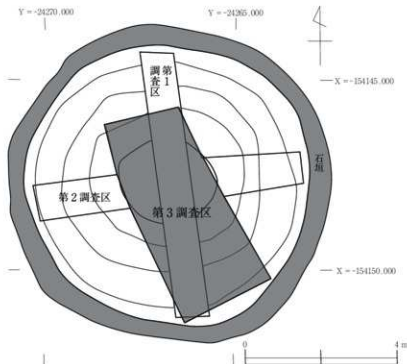


図5 舟塚古墳の調査区の配置図 1 : 100

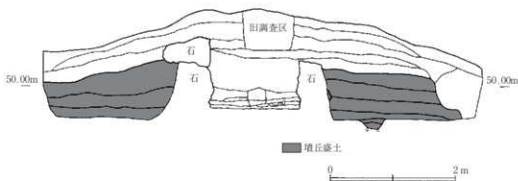


図6 墳丘断面図(第2調査区北壁断面) 1:60

土した。

墳丘盛土上端の標高は50.35m～50.4mであり、石室床面の標高が49.6mである。地山の上に盛土を施し、床面としている。(望月拓海)

(3) 石室(図7、図版5・6・7)

石室 石室は玄室と羨道で構成されており、右片袖式横穴式石室である。南東方向に開口している。石室床面上層より素弁蓮華文軒丸瓦(図11-1)が出土したことから、飛鳥時代に天井部や玄室側壁の上半部の石材が抜き取られたと考えられる。

石室の大きさは基底部で玄室長3.8m、玄室幅1.6mであり、奥壁は残存高0.9m、側壁は東側で残存高0.9m、西側で残存高1.3mである。羨道部の幅は1.2mである。

玄室 玄室は自然石が用いられており、平坦面を玄室の内側に向け、奥壁は5段以上、両側壁は3段以上積んでいる。1段目から石材を内側に内傾させ、持ち送りの構造が認められる。また、石材の使用法で特徴的な点は、玄室の奥壁と側壁の基底石が小さく、上に行くにしたがって石材が大きくなる傾向があることである。さらに、側壁の石材は目地が通っているのに対し、奥壁石材は両端部を除く中心部分に目地が通っていない傾向がみられる。床面に礫は敷かれておらず、盛土をそのまま床面として利用したと考えられる。また、玄門部床面から玄室に向かって石材が4石南北に並んでいるが、排水施設ではなく、玄室入り口付近の配石と考えられる。石室内には棺の痕跡が確認できなかったため、木棺が用いられたと考えられる。

羨道 羨道部はすでに破壊されているが、右片袖の袖石が残存している。羨道の幅は約1.2mである。(望月)

(4) 遺物の配置(図8)

石室内部から多数の副葬品が出土した。以下、奥壁付近、中央付近、玄門付近の順に遺物の配置について述べる。

奥壁付近 奥壁付近からは須恵器の高坏と壺、大刀1点、兵車鎖1点、轡1点、長頸鐵片18点、



図7 舟塚古墳石室実測図 1:30

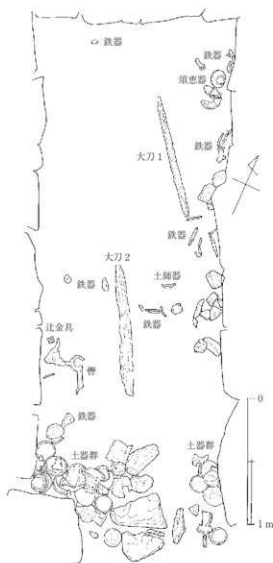


図8 石室内遺物出土状況図 1:30

などの土器類と鉄器が出土し、東側壁付近においても須恵器の坏身、坏蓋、土器が出土した。なお、玉類は石室内各所に散乱していた。

以上から、舟塚古墳の被葬者の位置を推定すると、奥壁付近に大刀が1点、中央付近に大刀が1点あることから、2人の被葬者が埋葬されたと考えられる。(松本)

3 出土遺物(図9~11、図版8)

(1) 鉄器(図9、図版8)

図9は石室内中央付近の西側から出土した辻金具である。半球形で無文の鉢部に1鋭尖頭形の四脚をもつ。四脚は一部破損しているが、残存している脚には尖頭形に沿った稜が認められる。脚部には鉄、鉢部には宝珠飾が残存しており、脚部鉄は扁平中型鉄で一点留め、宝珠飾は砲弾型の頭部で一点留めとなっている。鉢部と脚部の境目には黄金具の使用によると思われるクビレが

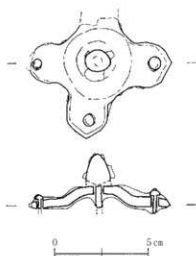


図9 舟塚古墳出土土辻金具 1:2

鉸具1点、不明鉄器2点が東側壁付近で、鉄斧1点、鉸具2点、棒状鉄器1点が西側壁付近で出土した。

中央付近 中央付近からは土器および長頸鉄片5点(うち3点に頸部関が確認できる)が東側壁付近で、轡1点、辻金具、有機質が付着した鉄器1点が西側壁付近で出土した。また、石室中央部で大刀1点が出土した。

玄門付近 玄門付近では多数の土器が確認された。西側壁および袖石に沿うように須恵器の坏身、坏蓋、子持壺、壺、土器

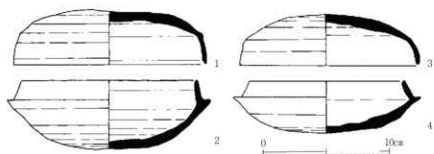


図10 舟塚古墳出土須恵器 1 : 3

確認できるが、貴金具は出土していない。法量は脚部を含めた直径7.4cm、最大高3.2cm、鉢部・脚部最大厚0.6cmである。脚部の尖頭形が顕著であることから宮代栄一編年のⅣ～Ⅴ期にあたと考えられる（宮代1986）。
（上野喜則）

（2）須恵器（図10、図版8）

石室内からは須恵器38点、土師器3点、その他、破片等が多数出土した。

須恵器 ここでは須恵器の坏身・坏蓋のうち、時期を示す良好な資料について報告する。

1は玄門付近西側の床面付近から出土した坏蓋である。口径は15.6cm、器高は4.2cmである。色調は内面が灰色、外面は青灰色である。胎土はやや密、焼成は良好である。天井部外面はロクロケズリが施され、灰降着がある。天井部内面は青海波紋が当てられている。口縁部は薄く凹線が通っている。

2は玄門付近西側の床面付近から出土した坏身である。口径は13.8cm、器高は5.4cmである。色調は内面が灰色、外面は青灰色である。胎土はやや密、焼成は良好である。立ち上がりは緩やかに内傾し、底部外面をロクロケズリで整形している。1、2の須恵器は陶邑編年のTK10型式であると考えられる（平安学園考古学クラブ1966）。

3は玄門付近の東側から出土した坏蓋である。口径は14.1cm、器高は4.0cmである。色調は内面が青灰色、外面は暗灰色である。胎土は密、焼成は良好である。天井部外面はヘラケズリで整形し、中央に×字のヘラガキがある。口縁部は丸く収める。屈曲部には稜や沈線がなく、なだらかになっている。

4は玄門付近の西側から出土した坏身である。口径は12.2cm、器高は4.1cmである。色調は内面・外面ともに灰白色である。胎土は密、焼成は良好である。立ち上がりは緩やかに傾斜する。底部外面はヘラケズリ。受部に重ね焼きの痕跡がある。3、4の須恵器は陶邑編年のTK43型式と考えられる。
（行天就要）

（3）玉 類

玉類は、琥珀玉11点、埋木製有稜棗玉1点が出土している。石室玄室内から散らばって出土し

た。琥珀玉は素玉であり、長さ2.5cm、厚さ2cmの大型のものと、長さ2cm、厚さ1.1cmの小型のものがあり、赤黒色を呈する。なお、残存状況は悪く、形状が明らかなものは3点ほどである。琥珀玉のうち、1点は円柱状の形状を示す。榧木製有稜素玉は、長さ1.8cm、厚さ1.2cm、孔径0.2～0.3cm。黒色を呈し、扁平な形状を示す。出土玉類の組み合わせから、大賀編年の後Ⅱ期（MT15～TK10期）～後Ⅲ期（MT85～TK43）に位置づけられ（大賀2013、2023）、出土須恵器との年代観に相違はない。（水川慶紀）

（4）瓦（図11、図版8）

後世の盛土からは丸・平瓦をはじめとし、多数の瓦が出土した。ここでは軒瓦2点を図示し、報告する（形式分類は花谷・毛利光1992、年代は奈良文化財研究所2007による）。

1は軒丸瓦で、第3調査区石室内流入土層より出土した。素弁八弁蓮華文で、瓦当径17.2cm、瓦当厚2.6cmを測る。中房は直径3.7cm、高さ0.3cmを測り、1+6の蓮子を配する。花卉は長さ3.8cm、幅4.0cmを測り、丸みを帯びた弁端に珠点を有する。間弁は楔形で連続し、中房まで伸びて花卉を区画する。調整は瓦当裏面をナデ。色調は灰白色である。胎土はやや粗で石英・雲母を含み、0.3cm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好。4A形式で7世紀初頭の所産である。

2は軒平瓦で、第3調査区遺物包含層から出土した。均整忍冬唐草文軒平瓦で、瓦当厚6.1cm。外縁は欠損し、顎は直線顎で唐草文の中心飾り部分は欠損する。平瓦部の凸面はナデ。一部8本

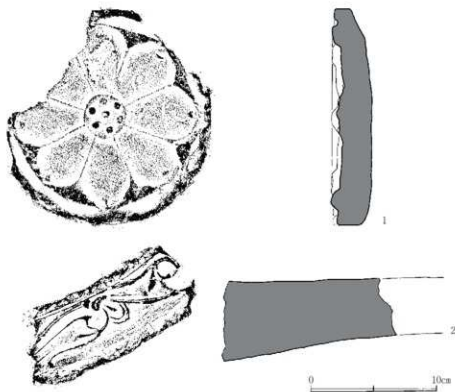


図11 舟塚古墳出土瓦 1：3

／cmの布目らしき痕跡が認められるが、判然としない。凹面はナデを施し、丹とみられる建築部材の塗料が一部付着する。側端部はケズリによって広く面取りされる。色調は暗灰色である。胎土はやや粗で石英・長石を少量含み、0.3cm以下の砂粒を含む。焼成は良好。216A形式で、下限年代は680年頃と推定されている。

これらの瓦は石室石材を抜き取る際、或いは抜き取った後に流入したものと考えられる。1の軒丸瓦は7世紀初頭以降に古墳が破壊されたことを示しているが、裏面の丸瓦接続部分が不明瞭になるほど摩耗しており、石材抜き取り時期はやや下るとみられる。

(竹村昂起)

第4章 総括

最後に、今回の調査成果を総括したい。

戸垣山古墳 戸垣山古墳では、第4・5調査区で墳丘盛土を確認した。第4調査区では残存する墳頂付近の盛土が方形を呈し、戸垣山古墳が方墳である可能性が高まった。いっぽう、昨年度の調査で確認した埋葬施設と考えられる土坑は、今回の調査区まで続かないことが判明した。墳形、墳丘規模、築造年代などを明らかにするため、引き続き調査する必要がある。

舟塚古墳 舟塚古墳では、第2調査区で残存する墳丘の東西端を確認した。本来の規模は不明だが、現状の形から、直径8.5m以上の円墳と考えられる。

第3調査区で横穴式石室の一部を確認した。石室は石片袖式で、南東方向に開口する。羨道部はすでに破壊されている。石室上半部と天井石は失われている。玄室は基底部で長さ3.8m、幅1.6mである。奥壁は残存高0.9mで、5段以上の石材を積んでいる。東壁は残存高0.9mで、3段以上の石材を積んでいる。西壁は残存高1.3mで、3段以上の石材を積んでいる。石室西側に袖石が残存している。羨道部の幅は約1.2mである。石室の奥壁と側壁の基底石に小型の石材を用いる特徴がある。

石室は天井石を抜き取られているが、その際に側壁が崩れ、多くの副葬品が残存していた。おもな出土遺物は大刀2点、鉄鎌、轡、辻金具、鉸具、琥珀玉、埋木薬玉、須恵器子持壺、台付壺、高坏、坏身、坏蓋、壺、土師器壺、土師器埴である。須恵器は陶邑福年のTK10型式からTK43型式に位置づけられ、築造年代は6世紀後半である。石室が崩れた際の埋め土から飛鳥時代の軒丸瓦片が出土しており、7世紀に石室が壊された可能性が高い。今回の調査成果は、藤ノ木古墳築造以前における斑鳩の様相を知るうえで重要である。

(豊島直博)

参考文献

- 荒木浩司 2007「駒塚古墳 (01-1次) 調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13 (2001) 年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳 (02-1次) 調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14 (2002) 年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2014「戸垣山古墳西側における立会調査出土の埴輪片について」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 泉森 皎編 1977『竜田御坊山古墳群 付 平野塚穴山古墳』奈良県教育委員会
- 大賀克彦 2013『玉類』一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社
- 大賀克彦 2023『石製・ガラス製玉類』『後期古墳研究の現状と課題1 交差編年の手がかり』中国四国前方後円墳研究会
- 勝部明生ほか編 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦・関川高功 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 北野耕平 1958『斑鳩大塚古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物抄報』第十輯 奈良県教育委員会
- 小林友佳・豊島直博編 2023『戸垣山古墳・舟塚古墳発掘調査報告書1』奈良大学文学部文化財学科
- 関川高功編 1976『斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報』奈良県教育委員会
- 豊島直博・松島隆介 2020「奈良県斑鳩町神代古墳測量調査報告」『文化財学報』第38集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡 2018「奈良県斑鳩町戸垣山古墳測量調査報告」『文化財学報』第36集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡編 2018『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅳ』奈良大学文学部文化財学科
- 中井一夫 1975『斑鳩町戸垣山古墳の測量調査』『青陵』No.27 奈良県立権原考古学研究所
- 奈良文化財研究所 2007『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 日本中世土器研究会編 2023『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 花谷 浩・毛利光俊彦 1992『昭和資料帳第15巻 法隆寺の至宝』小学館
- 平田政彦 2008『史跡藤ノ木古墳 保存整備事業報告書』斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013『春日古墳墳丘測量調査報告』『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 平田政彦 2014『瓦塚古墳群航空レーザー測量調査報告』『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 藤井利章 1986『奈良県斑鳩町 酒ノ免遺跡の研究』斑鳩町教育委員会
- 平安学園考古学クラブ 1966『陶邑古窯址群1』平安学園考古学クラブ
- 前園実知雄編 1990『斑鳩町の古墳』斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄ほか編 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 宮代采一 1986『古墳時代雲珠・土金具の分類と編年』『日本古代文化研究』第3号 古代文化研究—PHALANX—
- 山内紀嗣 1998『上宮王家の墓』『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻 網干善教先生古稀記念会
- 山本美喜福 2022『甲塚古墳発掘調査報告書Ⅳ』奈良大学文学部文化財学科

圖 版



1 戸垣山古墳調査前の状況（北西から）

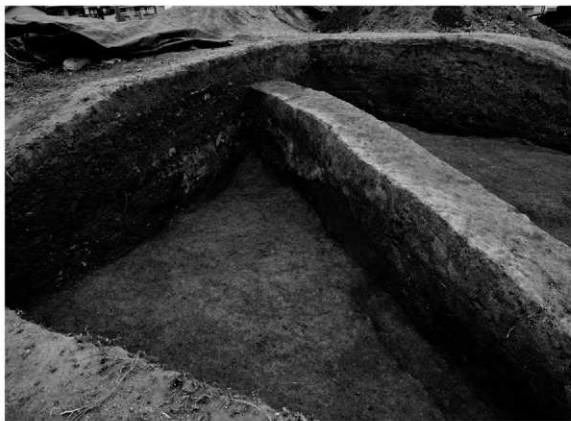


2 戸垣山古墳第4調査区完掘状況（北東から）

図版 2



1 戸垣山古墳第5調査区北東側発掘状況（北東から）



2 戸垣山古墳第5調査区南西側発掘状況（南東から）



1 舟塚古墳調査前の状況（南から）



2 第2調査区完掘状況（西から）



3 第2調査区完掘状況（東から）

図版 4



1 舟塚古墳石室上面検出状況 (南から)



2 石室内転落石検出状況 (北から)



1 舟塚古墳石室検出状況（南から）



1 石室内遺物出土状況 (南から)



2 袖石付近土器出土状況 (南東から)



3 奥壁付近遺物出土状況 (南西から)



1 石室奥壁（南から）



2 石室東壁（西から）



3 石室西壁（東から）

图版 8



1 戸塚山古墳出土土器



2 舟塚古墳出土土辻金具



3 舟塚古墳出土須恵器



4 舟塚古墳出土軒丸瓦



5 舟塚古墳出土軒平瓦

報告書抄録

ふりがな	とがきやまこふん・ふなづかこふんはつくつちょうさほうこくしよに				
書名	戸垣山古墳・舟塚古墳発掘調査報告書Ⅱ				
副書名	奈良大学考古学研究調査報告書第29冊				
編著者名	豊島直博、池木優衣、岩田朱音、植木実果子、上野喜則、尾形優真、行天就要、竹村昂起、常盤敬仁、松木研太、水川慶紀、望月拓海、森田将圭 (編集：松木研太、谷野誠也)				
発行機関	奈良大学文学部文化財学科				
所在地	〒631-8502 奈良市山陵町1500				
所収遺跡名	所在地		コード		
			市町村	遺跡番号	
戸垣山古墳 舟塚古墳	奈良県生駒郡斑鳩町龍田南2丁目137-1 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺1丁目1167		293440	7D-44 7D-72	
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
戸垣山古墳 34度60分53秒 舟塚古墳 34度61分02秒	戸垣山古墳 135度72分94秒 舟塚古墳 135度73分54秒	20230214～20230328 20230803～20230913	戸垣山古墳 45㎡ 舟塚古墳 17㎡	範囲確認調査 範囲確認調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
戸垣山古墳	古墳	古墳時代	墳丘	埴輪 土器	墳丘盛土を確認した。
舟塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘 石室	金属器 土器 玉類	石室の全体像を確認し、 多くの副葬品が出土した。

戸垣山古墳・舟塚古墳発掘調査報告書Ⅱ

2024年3月発行

編集 奈良大学文学部文化財学科

発行 奈良大学文学部文化財学科
〒631-8502 奈良市山陵町1500

印刷 有限会社 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル

